



道二為乃話六篇

下

9  
3406  
15止





道二篇道 詰六篇卷之下

浪華 八宮齋 輯

何るれ地... 素飯を喰い... 何の有縁い樂... 斯してわののが助... 先江河の鱗... 八編乃抄取不捨... 下も自滅... 八雀乃撮取不捨...

道二篇 詰六篇 卷下

故櫻井理行氏  
五十四年  
三月廿三日  
櫻井氏の  
寄贈



門 口 9  
號 3406  
卷 15

雀を走鳩一羽下し食物不足く飢死しこのいふは是れ  
猿も中ら是れ猪も中らつてつて食物なくつて人もか  
つれどついに節季に身をあげ首を切りと猿も是れ皆  
光明の中へ攝取せしめてわらふ也。節季より錢の  
是れぬい人をめりり皆兼用はしおぼくしと答とや。春は  
妻の食物夏はまじ食物と一年中天道の由は是れに  
引くも悉く助けてわらふ子供も親の儀りの攝取不捨  
で大安樂も助けてわらふ。丈夫足納よとせはふしをを  
つくりえと咽かほし。たが家もよやうにうぬくとを  
がきくしむは皆魔軍に身をまきとくわらふのとや。阿防羅

判の怨敵は布施の弓矢を以て防比と法然上人もいそ  
ござる。引息をいりりていりし終ぬかたが腐て仕也人  
又出る息をいりりて死なうやなうぬ。世出入れくう  
ないやうふせいと仰せまゝのトや。滅の布施は克己復禮  
我身を殺しのトや。  
人の為身を押しまぬが佛なり。樂行まゝう侍りていれ鬼  
此鬼めが身勝手なまゝうやうくし。禽獸も亦ら我信  
取ま人の外判ふ鬼の指骨がなひ也。何れもこの次第で助り  
わつて居る。世界れまが衆が助ると。ちりくうあく是る  
まて。孫くわとまの二羽もい。

道二道活六六篇 卷下







里が蓮基。たが何となく任む極樂を。粟虫いらりが蓮基。  
 屑虫いらりが蓮基。此中ふつとボクらの尻生いらり。  
 おとらつてふつと何れと屑が蓮基の徳授け何。ア屑虫  
 を奇麗な水があらひ。彼子此屑團の上之載せて名もを  
 賛く鼻したく。吾隱虫何とらつと何れか。おとらつて  
 かぶると。ツイ死んばは思入屑で産きつりのいらり。  
 中で攝取不捨とや。ボクらの尻生ふんはれとらつと。  
 胸よりくつと述てまぬ。ボクらの尻生で。捨取不捨せし  
 てぬ。

釈迦如来娑婆往來八子度も般若の智恵で自由な

さねのめとや。般若といひ此天の我なりて。往來わつと。  
 とや。極樂の莊嚴金銀瑠璃磚磔瑪瑙高貴往來中  
 通り。大極樂構かふとや。いまある極樂を移すか。  
 り極樂へ行ても佛様の妙義が出来るか。適く極樂  
 へ行ても妙義が通ひと。又りよの三途八難入りぬ。  
 とや。今日今日。誓古して神佛聖人の  
 教への通り此妙義せしや。わが妙義こそ出来るや。  
 別み妙義いでもわが極樂へ行。  
 くらふ滅の通りわが妙義の極樂へ行。  
 此中うな慥な徳文がある。則天神様が徳人よ。あるとあら



志のつこころ。一系都冷泉院様とつり山公家様か。  
雲の只慈覺寺にたり山姥山小出するを在郷の子  
供をいよせたり。僧政中つり菓子あつてはして秋を讀  
め何とつり。つりにするは寒災災を。とあらざるも  
何が在おれ子供さき。ふげ何とつりそのを何とつりや。  
申ふ十一歳あめ虎をいふ子。梅本に雪のおを  
えく秋を讀む。

つらひをよそられ脊戸をさす。そに書ぬ梅も有のふ  
とつりさバ跡の外はほびたり。山機娘がとつりや。此  
もつりさつりね。とつりおが大事の侍様とや。天子様でも

將軍様でも。つりれ強くもでもよそふかつりぬのがあか  
天の由慈悲ハ無心境界なれど。侍る本ハ己がさきで。  
平等一投お助けなれ。此平等の由なをけ  
梅と雪とつり。別是が妙法とや。妙法の二字と天  
地つりん限りつり。阿弥陀とつりても同とつりや。  
つりごも妙法も。大い世界費ひてつりなとや。うごひ  
まが天子様乃御庭で啼く時。是ハ天子様の御庭とや  
とつり。別念のさき。啼もせぬ。食は根とやとつり。法  
強くあつりつり。梅本も天子様乃御庭とやとつり。念  
のさき。咲もせぬ。梅本も梅本。攝取不捨とつり







吹竹も一ツの穴を一向宗。信心人よりや子孫長久老角金  
お小迷ふるやい。久米の仙人通力成りつても。此うとれ皮  
み迷ふこのトや。神佛乃をへも。げうその皮に迷ひまゐ  
トや。其うとれ皮れよ。色く振るのうとれ皮を。かづつ  
く。く。中く久。中。はく。危。が十年。廿年。の内。ふ。初  
方。色。ぬ。が。何。が。も。何。が。皆。う。を。れ。皮。小。迷。う。このトや。い。西  
小野小町。出。して。十二。ひ。く。も。多。る。統。の。終。も。多。る。山。は。じ  
も。多。る。又。を。食。喫。を。は。ま。り。て。事。も。多。く。丸。も。多。く。は。し。て。二。人。並。ぶ  
て。る。る。女。も。多。く。遠。ひ。い。ま。い。乳。も。二。ツ。あり。脈。乃。穴。も。何。り。ど。こ。小  
か。り。が。何。り。と。

考よてらのせでてい。せ。啼。ぬ。よ。を。ふ。か。り。ぬ。梅。も。あ。る。の。よ  
ど。つ。と。小。も。多。く。何。り。い。ま。い。と。の。白。ひ。ま。い。の。せん。ご。い。ま。い。と。を  
の。皮。の。迷。ひ。ト。や。

人王又十八代嵯峨の天皇様の御后極林皇后様この  
うその皮れ。ま。い。ひ。を。沖。解。と。か。と。ま。い。と。沖。年。廿。二。と。  
由。薨。御。さ。る。れ。沖。遺。言。ふ

是。が。骨。想。観。と。中。い。つ。り。で。九。想。待。と。い。書。物。小。迷。く  
流。く。何。の。沖。遺。骸。山。城。の。帷。子。が。過。り。捨。く。今。み。と。の  
古。跡。が。あ。る







不足つうりさる。佛拏の胸板は八寸釘を赤色のどや。種小  
 危角が身に立ぬり。親大来至人太子。有がいつくそ  
 機嫌よ。今日びくくんのが別極樂とや。或和尚の秋ふ  
 後まで無理し人よはなきて。是納さけが施縁鬼さうり  
 後まきと無理し人をも向ふ。いさい。皆此方の腹けうら  
 年中かりとにめくわ。もんとや。種まけ人を是納さ  
 このトや。物事。是納せぬりの。死に縁鬼ふめるといふ。不  
 便さゆしや。世小盗と根性乃何人。皆是納はふ死さ  
 人の再来とや。とつうり。或相者けははふ。小来おを親  
 ぶるといふ事がある。眼殺眼此そのはばき。盗むつうといふ

傳くつう。此盗と根性といふの。歴れよ。元乃肉ふも  
 るつう。そのトや。物事。是納はふ死さ。是納さる。ゆめ  
 痛いとや。まぶめつ。小欲びり。物事。わがり。兼用か。に  
 おづ。ゆへ。修ふ人を言ひ。身を中づる。思はしいものトや。  
 是納ハ心け。ゆへ。承ひ。来来。ハか。は。ゆ。ゆ。トや。スリヤ。大。抱。大。  
 切のゆしや。さ。い。始。め。の。ら。る。ハ。無。理。に。さ。る。是。納。ま。つ。け。る。が。よ。い。  
 あ。ら。ち。や。う。が。ま。さ。り。ふ。め。と。つ。う。ツ。イ。癪。付。と。本。ま。さ。る。の。め。  
 め。の。の。ト。や。一。切。の。ゆ。に。有。難。ひ。と。別。天。の。心。ゆ。へ。大。福。  
 長者ともいふ。誠いりの。始。終。り。誠。か。た。れ。バ。物。は。じ。あ。る。成。  
 就。さ。る。と。せ。ぬ。ハ。世。殊。乃。有。り。と。い。ひ。此。遠。い。ト。や。庚。申。採。を







らこれ大師様も唐申様もは後世中。勅法をして何と申や  
まいた皆我中。小立ゆりてんま。一切の諸神法佛の  
解皆家。二備りてごごき。バツも不自由。あひるい。そ  
信心を志き果す。よそれ。子世後。も中。にどしてわ。い  
あゆ。下。り。す。と。や。

此最芝居の狂言。小肉屋源太。備門とい。り。の。か。ま。と。振  
の。魚。だ。く。み。して。わ。あ。飛脚が。杖。を。持。て。来。て。モ。ウ。シ。け  
の。り。再。肉。屋。源。太。備。門。とい。い。ご。ご。り。ま。せ。ぬ。う。か。い。こ  
そ。中。う。か。ん。し。と。そ。ら。う。や。ご。ご。ね。ソ。テ。飛脚が。ど。い。で。も  
は。何。と。り。と。あ。り。ま。し。こ。が。変。て。源。太。が。い。い。よ。山。持。た。と

まや。ど。い。中。の。笑。さ。中。も。名。と。や。が。と。小。首。か。さ。あ。け。く。ま。ぬ  
不。ど。い。物。と。笑。さ。中。も。名。と。や。が。と。別。子。に。ご。ご。り。ま。ぬ  
狂言で。あ。ると。た。ま。い。も。さ。い。中。も。か。り。な。こと。大。築。此。ら。く  
わ。小。皆。迷。う。と。わ。の。の。と。や。日。に。れ。人。欲。み。引。張。く。ま。こ。肝  
ん。の。我。信。心。成。す。を。れ。子。の。中。に。あ。り。わ。か。ら。い。の。の。と。や  
是。と。や。れ。よ。う。と。ん。中。身。さ。げ。首。ら。り。も。こ。れ。後。の。も。也  
経。も。出。来。る。と。ら。づ。と。や。ま。ま。が。い。や。さ。ふ。先。生。方。か。心。成。に。ご。れ  
本。心。に。知。り。中。も。を。工。夫。の。仕。よ。い。中。に。あ。り。あ。を。は。ま。と。め  
か。ら。の。の。と。や。ご。ご。り。も。は。知。り。も。た。れ。も。あ。ら。り。じ。ま。せ。  
本。心。を。知。る。は。家。に。る。い。り。成。知。の。の。と。や。世。家。と。と。あ。ら。り



わらわはたぐいば、養の肉み火成と成してあつて何ふも不自  
申ふるは、いづれと申ふるは、わらわの成養の外へは、出して  
申ふるは、わらわの申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、  
世話もの成、大抱自申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、  
りじませ。

京都小者、此醫者招の母、六年は、申ふるは、申ふるは、申ふるは、  
申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、  
も火宅れと成して、大抱自申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、  
識り申お供なされと成して、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、  
と成して、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、

と成して、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、  
申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、  
申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、  
申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、  
申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、  
申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、

申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、  
申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、  
申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、  
申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、  
申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、  
申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、申ふるは、







板二枚はじこを削り。泥足るまで入申へ。少く板はかまふが  
これ申しにぬく。その板ふまふが。紙はるは後磨本の  
やうな。本切が隅ふある。までこそげぬのトや。つらつら。是  
佛。乾屎。椶屎。厚くが佛トや。とりよる。きこころ。いりの  
を。こそげぬ。ぬるが佛申す。あの尻達。が佛。秘く。たか  
佛。一切の不浄を拭く。跡で。隅の方。ふまて。是  
で佛。換の辭を。能く。免けて。申す。じませ。又。越後。此方  
下。ハ。香。隠の。つら。小。繩。が。引。張る。つら。その。繩。小。股。が。り。く  
こそげぬ。坊の。つら。りの。トや。なん。小。糸。や。大。坂。の。女。申。を。  
二十日。な。と。繩。を。り。が。こ。て。て。ん。こ。い。結。構。る。着。物。を。て

三度。く。米。の。飯。喰。う。と。ど。の。う。の。く。小。え。を。り。り。  
勿。辭。を。い。り。ト。や。皆。罰。が。つ。は。ど。く。の。申。し。は。し。こ。と。く。  
此。世。を。ま。ら。り。の。世。人。を。り。ト。や。二。切。百。物。皆。かり  
の。世。に。麻。も。麻。と。ま。り。ま。て。わ。る。ハ。解。の。かり。の。世。破  
ま。て。風。呂。は。り。申。す。に。ら。た。ま。ハ。解。と。り。名。ハ。綱。り  
と。り。て。天。に。ぬ。る。形。を。去。へ。り。の。ト。や。一。切。百。物。を。り  
天。へ。ぬ。る。申。す。一。天。四。海。皆。歸。妙。法。皆。攝。取。不。捨。せ。し。て  
か。る。大。も。かり。の。世。ち。り。く。う。わ。く。も。かり。此。世。こ。ふ。る。子  
も。一。代。八。十。九。十。も。一。代。皆。かり。の。世。れ。り。任。居。永。い。未。来  
と。い。つ。と。心。の。ゆ。地。獄。ハ。何。り。の。が。行。ぞ。又。極。樂。ハ。何。り。の。が







ちるやうかみのとや。水みづを離ときて生なておる矣や。人ひとも  
 天あまを吾われびり吐はきりして天あま祇ただ心こころしる居ゐるがう。今日こんにちら  
 しくいふと。とらうく遠とほいよりうけておるのとや。世よ中ちゆうに  
 あけとけふいふと。さうして。中ちゆうにむり世よ虚空こくうハ何なにもい  
 りのどやとあつておるまゝ。んまの小人せうじんのと。送おくり号ごうが付つ  
 ておる。は君きみをたておつて。びりくくと音おとがとる。何なにもあつと  
 つらきね。徒た接せつとや。又またあやげハ虚空こくうがかこまりて。風かぜと  
 其その風かぜがたんと集あつると。よ石いし船ふねも石いし船ふねも吹ふちらる。んふ  
 形かたちがたれど。何なにと強つよいものとや。まて。金かね剛がうの神かみも。又また般はん  
 若わかとも。般はん若わかとも。知ち恵えの子こ。長なが短みぢが能よくする。是これハとこく  
 智ち恵えとやど。又また唐たうへ往いても天あまへ往いても。家いへ心こころの境けい内ない  
 や小せうより。六む十じゅう万まん候こう那な由ゆ多た恒こう河が沙しゃ由ゆ旬じゆんの佛ぶつ接せつも。水みづ  
 近ちか付づにる。れまに。別べつ阿あ字じの性じやう解かいとも。光くわう明めいとも。儒じゆ道どうで  
 ハ明めい徳とくとも。神しん道どうでハ國くに常じやう立たつ尊そんとも。まうと。天あま津つ中ちゆう  
 自じ由ゆうとも。皆みな世よ天あま乃の名なとや。世よ界かい中ちゆうが心こころとや。れよりと  
 自じ由ゆうが。おま。こりのとや。まをま。ぬ。あ。ま。る。お。み。を。書か  
 と。妻つまと。れ。火ひ乃の玉たまが。屋や根ねで。は。く。を。合あし。こ。る。と。さ。あ。け。も  
 る。い。り。を。い。ひ。お。け。の。と。や。皆みなま。人ひとお。れ。火ひの。玉たまが。邪よ魔まふ  
 め。何なにび。う。で。も。合あふ。点てんが。移うつぬ。其その思し素そ分ぶん別べつを。こ。も。の。こ。て。  
 此この款くわん能よく。水みづを。む。さ。り。ま。せ。

道二言六卷一  
 卷下  
 一六







道二翁言六卷 卷一  
深しやられど。何をいふても。此うそは皮ふも隔てられず  
此うそは皮ふも隔てられず。沙念る事トや。  
どつどいふそのはめが。中少きこと。海兄弟の界ハ  
吾子なりといふ。時節かござりまじや。此まじや情  
おしやえまじや。

道二翁道話六篇卷之下終

自初篇至六篇  
全部十五冊大尾

文政七甲申歳八月發行

敦厚舎之部

弘所書肆

大阪心齋橋南壹丁目

敦賀屋九兵衛

岡谷町四丁目

本屋吉兵衛



